読売、2021.2.14

ランキング
Ranking

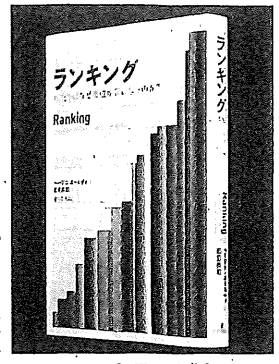
ペーテル・エールディ著

評・稲野 和利（ふるさと財団理事長）

健全な懐疑で向き合う

ネット空間でも紙のメディアでも、今や私たちの日常においてランキングと呼ばれるものを目にしない日はない。

「おいしいレストラン20選」、「住みやすい町ランキング」、「大学ランキング」、「病院ランキング」、「危ない銀行ランキング」……。本書は、ランキングのメカニズムを解説し、利用者が陥りやすい陥穽（かんせい）を指摘しながら、ランキングに向き合う知的態度を教えてくれる。投票制度、人事評価プロセスの定量化、信用スコア、大学ランキング、科学者のランキング、検索エンジンなど俎上（そじょう）に載せられるものはいずれも興味深い。



日本評論社
2700円

ランキングは、データベースとアルゴリズムによって生み出される。アルゴリズムを変えれば、結果のランキングも変化する。ここで便利さと操作可能性は隣り合っている。「ランキングというのは、どの指標を重視し、それらにどう重み付けするかにかんする主観的な意見表明でしかない」という著者の言葉に得心がいくならば、健全な懐疑とともにランキングに冷静に向き合うことができよう。「出来合いのランキングのみにもとづいて自分の行動を決めるのは望ましくない」のは当然であり、可能であるならばランキングを決定する個別要素のウエイトを自分の好み等で変えた「個別化ランキング」が有用となる。

説明責任や透明性という言葉が呪文のようにあちこちで唱えられる今日の環境では、社会も企業も定量的指標による測定や評価に傾斜していく。それはランキングの利用であり、客観性の追求でもある。本書は一貫して客観的であることの困難さに触れるが、それでも定量的指標の有用性は否定しない。著者は「慎重に信用する」というルールを提唱するが、これこそがデジタル社会で求められる行動様式なのであろう。評者は「慎重に信用する」という言葉を吟味すればするほど、主観的評価の問題について考えずにはいられなかった。

高見典和訳。

◇Péter Erdi＝米国カラマズー大学複雑系研究センター教授。専門は計算論的神経科学。

評・橋本 倫史（ノンフィクションライター）

人志とたけし

杉田俊介著

2019年、批評家の杉田俊介が「松本人志についてのノート」と題する批評文をインターネットで公開した。原稿用紙70枚ほどの批評文は反響を呼び、著者の「ビートたけし／北野武論」と合わせて書籍化されることになった。

松本人志論の反響の大きさに、著者は「芸能人やお笑い芸人という存在そのものが、現代の社会的・政治的現実のあり方を何らかの形で象徴しているのではないか」と感じたという。芸能界やお笑いの専門家ではない著者ならではの視点は、松本人志に「何もかもをかきまぜて」「台無しにしていく薄気味の悪い悪意の虚（かな）しさ」を、ビートたけし／北野武に「灰色の無限の退屈さの果てにある、くだらねーとしか言いようのない笑い」を見出（みいだ）す。

本書は2章立てになっており、第1章の批評文をもとに、第2章では九龍ジョー、マキタスポーツ、矢野利裕、西森路代との討議が収録されている。四氏とも、同時代の芸能に対する見巧者である。ここで重ねられる批評の言葉は、ただぼんやりとテレビを眺めてきたわたしに、考える糧を与えてくれる。（晶文社、1750円）

『わたしの好きな季語』川上弘美著　わかめ、日永、北窓開く……。俳句が好きなことで知られる著者が、季語や俳句について書いたエッセー96編を収めた。季語の存在を初めて知ったのは大学生のころで、大学の図書館で歳時記を見つけ、愛読するようになったという。作家のことをより身近に感じられる一冊。（NHK出版、1700円）

来週の書評本は、読売新聞オンラインで紹介しています。